

Title	離島振興におけるエコツーリズム : 島の未来をエコツーリズムは担うのか
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	観光, 482: 15-18
Issue Date	2006-11-20
Type	Article
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/17266
Rights	本著作物は日本観光協会（2011年日本観光振興協会に改称）の許可のもとに掲載するものです。Copyright (C) 2006 日本観光協会. 敷田麻実, 観光, 482, 2006, pp.15-18.
Description	特集 島の観光を考える

離島振興における エコツアーリズム

島の観光を
考える

島の未来をエコツアーリズムは担うのか



西表島船浦湾のエコツアーで休息するエコツーリスト

エコツアーリズム。この言葉が紹介されてから15年ほどの間、観光・地域振興・自然保護にかかわる関係者はずっとこの言葉に魅了されてきました。

日本では先進地と言われている西表島や屋久島では、エコツアーリズムが「エコツアー」として現実になり、国内各地でも実践が始まっています。もはやエコツアーリズムは、離島で観光による地域振興を考える際に切り離せないマジック



しきだあさみ

敦田麻実

金沢工業大学教授

ワードです。そこで、離島におけるエコツアーリズムの可能性と問題点について考えてみたいと思います。

エコツアーリズムとは何か

エコツアーリズムに特に関心がない人でも、「エコ」がついているのでおそらく想像はつくでしょう。エコツアーリズムを一言で

言えば、「与える負荷を最小限に抑えながら自然環境を体験し、観光の目的地である地元に対して何らかの利益や貢献のある観光」です。自然環境だけではなく、時には文化遺産も観光対象になります。

世界的には1980年代後半から、日本でも1990年代後半から注目を浴び、最近では環境省から「エコツアーリズム憲章」も出されています。しやれた響きの「エコツアーリズム」という言葉を使う時、人は暗に、自分が「自然環境保全の理解

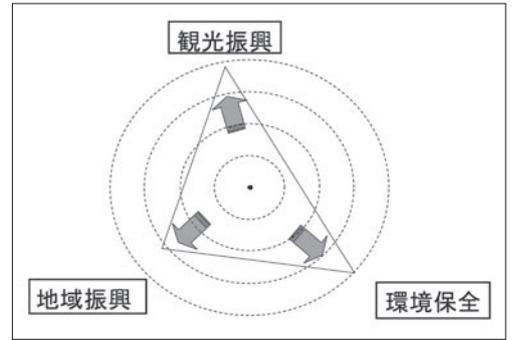
者」だというメッセージを込めます。だからこの言葉に異を唱えることは難しいのです。また、エコツアーリズムは「観光」だと認識することも重要なポイントです。この場合の観光とは、宿泊を伴う旅行であり、日帰りが基本のレクリエーションとは区別したいものです。観光は日常生活圏外にある観光目的地まで行って活動することであり、観光客は何らかの「非日常」を期待しています。

エコツアーリズムを「観光」と呼ぶと、エコツアーリズムは自然環境保全の手段だ、観光ではなく環境学習プログラムだ、と自然環境保全側から反論されることがあります。それはもつともな主張ですが、観光客が観光地に来て、そこで観光関係者が「エンターテインメント」の機会を提供している限りは、エコツアーリズムも自然環境を対象とする観光のスタイルのひとつです。

もちろん従来型の観光との違いはあります。従来型観光では地域振興と観光振興に焦点が当てられ



ニュージーランド・オタゴ半島でペンギンを観るツアーのエコツーリストたち



エコツーリズムの基本的性質を表す三角形のモデル

がちでしたが、エコツーリズムでは、自然環境の保全と地域振興を同時に進めながら、観光の振興も図ることを目指します。それは上図のように、自然環境保全と地域振興、そして観光振興で示される三角形のバランスをとることです。ただし、どのように三角形のバランスをとるかは、時と場合、地域によって違いがあります。

またエコツアーとエコツーリズムの違いは、前者が個々のエコツアーという「商品」を指すのに対し、後者はそれを支える「仕組み」によって構成される考え方や実践を表しているという点です。

離島観光におけるエコツーリズムの現状

【国】 内6800あまりの離島の立地条件が多様であること



小笠原南島に上陸するエコツアー

を考えれば、離島という前提で一律に論ずることはできません。しかし、本土に比較して一般に開発圧力が弱く、豊富な自然環境が残された離島は、いわば「残された楽園」のイメージとともに、「手付かずの自然」を求めるエコツーリストにとって格好のターゲットとなつていきます。離島側にとっても、地域資源を有効活用しながら地域振興ができ、かつ環境保全可能となれば、エコツーリズムへの期待が膨らむのも無理はありません。

エコツーリズムの事例として、亜熱帯林と周辺のサンゴ礁、またイリオモテヤマネコという「スター生物」を擁する沖縄の西表島を挙げることができます。人口約2300人の西表島には、年間35万人の観光客が訪れます。地域外の資本による開発問題を抱えつつも、カヤッキングやサンゴ礁域でのダイビングで多くの観光客を呼び寄せています。

また東京都の小笠原諸島では、本土から1000 km以上離れた亜熱帯の立地を生かしてホエールウォッチングや島内のトレッキングが魅力です。都は小笠原振興策のひとつにエコツーリズムを位置づけ、自然ガイド認定講習などエコツーリズムのための積極的な施策を進めてきました。さらに屋久島では、1993年の世界自然遺産登録後、「世界遺産の島」のイメージとともに

に「自然体験ツアー」が拡大しました。縄文杉を核としながらも、環境にやさしい「エコ」のイメージを島全体で観光客に対して表現しています。

こうした、もともと観光地として知名度の高い、いわば「主流」とも言える離島以外でもエコツーリズムは広がっています。筆者の知る島根県の隠岐の島の例では、地域資源の再評価と学習活動に支えられた地道な取り組みが進められています。また長崎県の対馬や北海道の礼文島をはじめ、離島振興や離島観光の同義語のように、エコツーリズムが地域のテーマになっています。

このように従来型の観光地の離島でも、またそれ以外の離島でも、エコツーリズムは確実に広がっています。ここで重要なポイントは、エコツーリズムという、海外で生



西表島船浦湾のカヤックツアー



小笠原のエコツアーの「シンボル」ザトウクジラのバイオロゴをバックに

まれて日本に持ち込まれた「自然に優しい観光」というイメージのエコツーリズムが、そのまま離島で行われてはいないことです。実際には、地域文化や多様な自然環境の設定の差から、さまざまなタイプのエコツーリズムが離島では成立しています。

こうした離島独自のエコツーリズムを「本来の」エコツーリズムではない、と批判することはたやすいでしょう。しかし、そもそも地域の持つ固有の自然環境や文化を観光資源にしている以上、原生自然を愛で、極力影響を与えないという、欧米で生まれたエコツーリズムがそのまま成立するかどうかは疑わしいものです。特に離島で

は、地域住民の生活と自然環境の距離は近く、人と自然の関係性は豊かです。その「島暮らし」こそ島の重要な資産であり、維持する努力を必要とします。そのため「本当の」エコツーリズムにこだわらなあまり、離島のエコツーリズムがその視点を失ってはなりません。

エコツーリズムにより 離島観光は振興するか

て、エコツーリズムで離島振興が実現するかという問いには、批判を承知で「短期的な実現」なら可能と回答できます。エコツーリズムは、運輸・外食・宿泊などかわる地域関係者が多い「観光」であり、域内の産業連関が強く、メリットを広く地域に還元できる乗数効果の高い地域振興手法だと考えられるからです。エコツーリズムでは前者に加え、自然解説ガイドや環境教育関係者まで関与するので、効果はより大きくなります。

しかし、資源や環境容量の限られた離島で地域振興という目標だけを追求すれば、たちまち持続可能な観光ではなくなることは目に見えています。逆に、離島の特性や立地を考えるならば、地域がエコツーリズムをマネジメント可能な範囲で「うまく使う」ような、持続可能なエコツーリズムを実現し

たいものです。

でも、自然環境を保全しながら観光を振興し、さらに地域も豊かになるという、そんなことが本当にエコツーリズムで可能でしょうか。仮に、観光や地域振興だけを求め、自然環境保全を忘れれば、エコツーリズムの理想からは外れ、持続可能な観光ではなくなります。この点でエコツーリズムは、飼いや慣らされていない荒馬に乗るようなものです。乗りこなせば駿馬となるでしょうが、馬の勢いに負け落馬すれば自らが傷つきま

す。一方、離島の貴重な自然環境にまったく手をつけずに「保護」することも極端な選択です。島外の自然保護関係者は、「自然保護意識が高い島だ」とそれを歓迎するかもしれませんが、一方的な保護は採集や漁業なども含めた離島の歴史的、民俗的な自然環境とのかわりまで否定しがちです。それは、島の住民が「地域外の論理」に他律的に従うことであり、外部者による開発と本質的な差は少ないのです。

こうした保護か利用かという二者択一の隘路に、エコツーリズムは島の自然環境の利用と保全の両立、つまり「持続可能な利用」という新たな道を示しています。そのためには、地域が自律的に地域資源を管理できなければなりません。



オーストラリア・ケアンズ郊外
クーランダのガイドツアー

またそのメリットを最大化したいのであれば、観光施策自体のマネジメントも必要です。

今後の可能性と問題点

離島（地域）側がリーダーシップをとっている観光現場は、エコツーリズムでもまだ少ないのが現実です。観光は「プロ」の仕事だと思ひ込み、自分たちで考えずに地域外の観光業者や外部の専門家に依存すれば、「他律的な観光」を余儀なくされます。この状態では、観光商品という「完成品」を作る地域外の観光資本や専門家に、地域が自然環境という「部品」を提供する従来型観光との差は少ないのです。

エコツーリズムという新しい観



ニュージーランド・カトリンズ海岸でペンギンの上陸を観るエコツーリスト

光メニューを選んでも、地域内外の観光関係者の「力関係」が変わらない限り、今まで通り「おいしいところ」を外部にとられるだけでしょう。そして、地元への協力金の支払いなどで「正当化」され、自然環境保全だけを離島側が強いられることになりかねません。

しかし意識していれば、観光における島と外部との「力関係」をエコツーリズムで変えることは可能です。そのためには、観光客のニーズや観光業者の誘導に乗り、島の自然環境を「部品」として提供するのではなく、観光という仕組みを「デザインする立場」に島の関係者が立つことです。

エコツーリズムなら、観光業者でなくとも堂々と「観光業界」に立ち入って行けるはずで、なぜなら観光資源である地域の自然環境に詳しいのは離島側だからです。そうすれば、マスツーリズムで奪われた「自律性」を地域に取り戻すことができます。離島でエコツーリズムを実施する際には、自然環境保全だけでなく、観光における地域の自律可能性を重視したいものです。

もっとも、「島だけでエコツーリズム」ということを筆者は勧めていたわけではありません。地域が自律性を持つのであれば、観光の一部を地域外の関係者に依存すること自体は何ら問題ないでしょ

う。また地域外の専門家の助言や支援は、エコツーリズムに必要な科学的・専門的知識の不足を補完するでしょう。このように依存でも独立でもない「自律的な依存」の関係こそが地域で「マネジメント」されなければなりません。

最後に、離島におけるエコツーリズムを考える際に忘れてならないのは、よく考えてみれば私たちは「日本という離島」に住んでいるということなのです。この列島の環境容量を超える開発や、地域の文化を無視した他律的な観光振興は持続可能ではありません。

持続可能な観光の実現のためには、地域資源を再評価し、それを維持するための努力を私たちが忘れてはなりません。離島におけるエコツーリズムの「先進例」はそれを明示しています。



オーストラリア・ケアンズ郊外。ガイドによる熱帯雨林の解説